

大峰ヶ台遺跡

— 10 次調査 —

2007

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

大峰ヶ台遺跡

— 10 次調査 —



2007

松山市教育委員会

財團法人松山市生涯學習振興財團

埋蔵文化財センター



卷頭図版 調査風景（南東より）

序

松山市のシンボル、松山城がそびえる勝山と相対するように並び立つ丘陵が、松山市西部にあります。現在、市民の憩いの場としてにぎわう松山総合公園一帯の丘陵が、本書で報告される大峰ヶ台丘陵です。この大峰ヶ台の頂上に立つと、松山平野全域はおろか、遠く瀬戸内の島々や、石鎚連山を一望することができます。

この人峰ヶ台丘陵上や、その周辺地域には、松山平野でも指折りの有名な遺跡が分布しています。松山市における、本格的な埋蔵文化財調査の発端となった「古照遺跡」や、古墳時代前期の首長墓「朝日谷2号墳」などがその代表的なものです。また丘陵頂上部では、松山平野を代表する弥生時代の高地性集落、さらに丘陵の各所で中・後期の古墳群が調査されています。

本書で報告される大峰ヶ台遺跡10次調査地は、この丘陵の南麓で調査された弥生時代を中心とする遺跡です。出土した遺物には、弥生時代のほか古墳時代から近世に至るまでのものがあり、各時代を通じてこの丘陵が人々の暮らしに重要な役割をはたしていたことがあらためて明らかになりました。

このような成果を挙げることができましたのも、調査にご協力いただきました各方面のご理解とご協力のたまものと心より感謝申し上げます。本書が、埋蔵文化財の普及・啓発、研究に広く活用されますことを心から願っております。

平成19年3月31日

財團法人 松山市生涯学習振興財團

理事長 中村時広

例　　言

1. 本報告書は、松山市南江戸において松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが実施した大峰ヶ台遺跡10次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、松山市都市整備部公園緑地課により計画・実施された「花見公園」リフレッシュ工事に伴う事前調査として、2006（平成18）年3月1日から同年4月14日までの間実施された。
3. 遺物の実測・製図、造構図の製図等は、丹生谷道代、矢野久子、多知川富美子、萩野ちよみ、矢鋪妙子が行った。
4. 造構の撮影は、大西朋子および調査担当者が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。
5. 遺物の縮尺は、土器・土製品を1/3にすることを原則とし、石器・石製品、金属製品を1/2で掲載した。
6. 使用した方位は座標北（世界測地系）である。
7. 本報告にかかる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに保管されている。
8. 本報告書の執筆・編集は、栗田茂敏が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 組織	1
3. 環境	2
(1) 地理的環境	2
(2) 歴史的環境	2
第2章 調査の成果	6
1. 試掘調査出土遺物	6
2. 調査地に地形と調査区の設定	6
3. 遺構と遺物	8
(1) 1区、T 2・3の調査	8
(2) 2区、T 4の調査	29
(3) T 1、3区の調査	30
(4) その他の採集遺物	30
第3章 まとめ	35

挿図目次

図1 調査地と周辺の主要遺跡	3
図2 試掘調査出土遺物	6
図3 調査地位置図	7
図4 調査区全図	9
図5 1区、T 2の遺構配置	11
図6 土坑SK 1・2	12
図7 T 2第8層遺物出土状況・北壁土層図	13
図8 1区北壁～T 3北壁十層図	14
図9 1区谷部（第8層）出土遺物（1）	15
図10 1区谷部（第8層）出土遺物（2）	16
図11 1区谷部（第8層）出土遺物（3）	17
図12 1区谷部（第8層）出土遺物（4）	18
図13 1区烟出土遺物	20
図14 1区搅乱出土遺物	21
図15 T 2第8層出土遺物（1）	23
図16 T 2第8層出土遺物（2）	24
図17 T 2第16・17層出土遺物（1）	25
図18 T 2第16・17層出土遺物（2）	26

図19	T 2 第16・17層出土遺物（3）	27
図20	T 2 摂乱層出土遺物	28
図21	T 3 出土遺物	29
図22	T 4 北壁土層図	29
図23	2区、T 4 出土遺物	30
図24	T 1 西壁土層図	31
図25	3区南壁土層図	32
図26	T 1 出土遺物	33
図27	3区第16層・摂乱出土遺物	34
図28	3区第19層出土遺物	35
図29	採集遺物	36

図 版 目 次

巻頭図版 調査風景（南東より）

図版1	調査前全景（1）（北より）	調査前全景（2）（南東より）
図版2	掘削風景（北東より）	掘削完了後全景（東より）
図版3	1区西部摂乱状況（南東より）	1区西部谷地形検出状況（南東より）
図版4	1区西部谷遺物出土状況（北東より）	1烟道構検出状況（北より）
図版5	1区烟水口状遺構（北東より）	2区烟道構検出状況（東より）
図版6	3区南壁土層（北より）	T 1 全景（北より）
	T 4 全景（西より）	
図版7	T 2 第8層遺物出土状況（南西より）	
図版8	出土遺物（1）	
図版9	出土遺物（2）	
図版10	出土遺物（3）	
図版11	出土遺物（4）	
図版12	出土遺物（5）	

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

松山市西部に所在する独立丘陵、大峰ヶ台は弥生時代の遺構・遺物や、多くの古墳が分布することで古くから知られ、この丘陵全体が松山市の指定する包蔵地のうちの、No32・33「大峰ヶ台弥生遺跡・大峰ヶ台古墳群」という周知の遺跡となっており、1974（昭和49）年以降、松山総合公園整備に伴う調査をはじめとして、9次にわたる発掘調査が実施されている。丘陵南麓には、国宝である平安時代の本堂を持つ「大宝寺」がある。2005年12月、この寺の境内に所在する児童公園「花見公園」リフレッシュ工事に伴う埋蔵文化財確認申請が、松山市都市整備部公園緑地課（以下、公園緑地課）より松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請を受けた文化財課と公園緑地課との間での試掘調査に関する協議の結果、文化財課の指導のもとに（財）松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が試掘調査を担当することとなり、2006（平成18）年1月10日、申請地における試掘調査を行った。その結果、申請地の南から南西部の2箇所に設けたトレンチにおいて、弥生時代から近世までの遺物を伴う包含層や柱穴の遺存が認められた。一方、北東に設けたトレンチでは、遺構・遺物の痕跡が認められなかった。この結果を受け、公園緑地課、文化財課の二者は、あらためて本格調査にかかる協議を行い、工事により遺跡が失われる部分については緊急調査による記録保存で対処することとなった。調査は、（財）松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが主体となり、公園緑地課および、土地所有者である宗教法人大宝寺の協力を得て、2006（平成18）年3月1日から4月14日の間実施された。

2. 組織

松山市教育委員会	教 育 長	土 居 貴 美
事務局	局 長	石 丸 修
	企 画 官	江 戸 通 敏
	タ	仙 波 和 典
	タ	宮 内 健 二
文化財課	課 長	家 久 則 夫

（財）松山市生涯学習振興財團

理 事 長	中 村 時 広
事 務 局 長	吉 岡 一 雄
タ 次 長	丹生谷 博
調 査 監	杉 田 久 憲

埋蔵文化財センター

所長	丹生谷 博一
次長兼管理係長	重松 幹雄
次長兼調査係長	田城 武志
担当	栗田 茂敏

調査地 松山市南江戸5丁目1463番地

調査面積 1,380.87m²のうち243m²

調査期間 2006(平成18)年3月1日～4月14日

3. 環境

(1) 地理的環境

松山平野は、その北東部を高龜山系南西面に、また、東から南東部を四国山脈北東麓に限られ、西方の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。調査地の所在する大峰ヶ台丘陵は平野の西部にあって、西方の伊予灘に開ける海岸線から約3.5km、北方の齋灘の海岸線から約7kmに位置する独立丘陵である。平野は、現在平野を西流する2大河川、石手川・重信川の沖積作用によって形成されたものであるが、丘陵東・南麓にはこのうちの北方の河川、石手川の支流、宮前川が流れている。

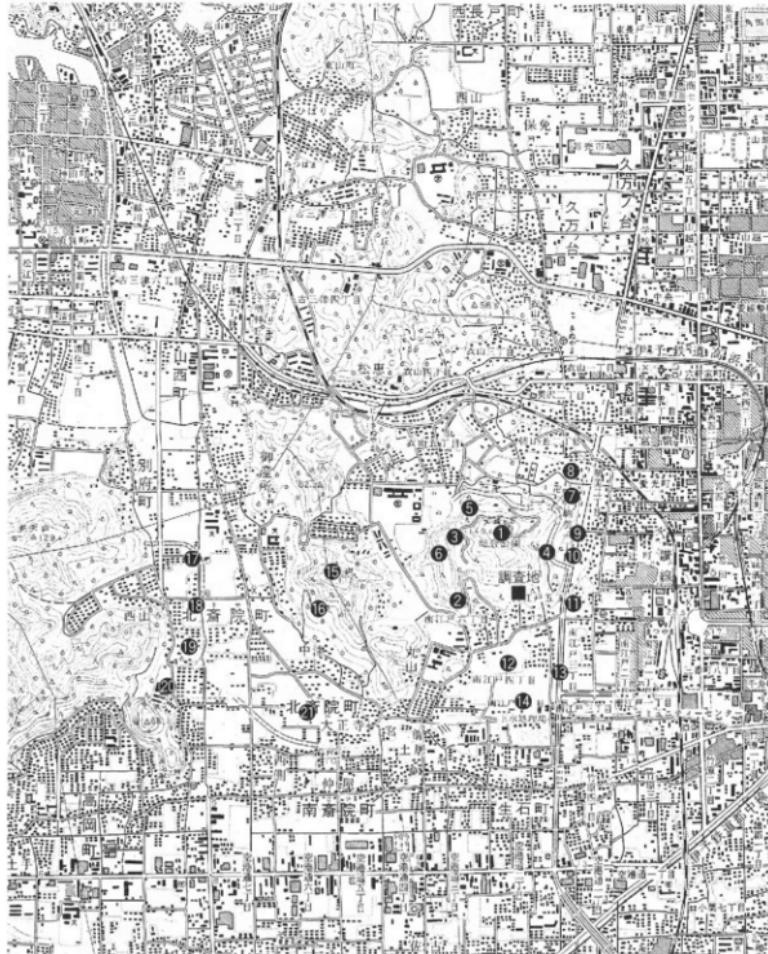
海拔133mを測る丘陵頂部からの眺望は当平野の独立丘陵中でも隨一で、南西は伊予市、北は北条の海岸線までを一望でき、沖合いに浮かぶ瀬戸内の島々も手にするが如く望むことができる。また、平野部に眼を転じれば、はるか東方の石龜連山を背景に、松山平野の隅々までを見渡すことができる。周辺平野部の標高が8～12mということであるから、丘陵頂部周辺との間には約120m程度の比高差があることになる。

(2) 歴史的環境

ここでは、遺跡の所在する大峰ヶ台丘陵上、および周辺平野部の遺跡分布等を概観していくことにする。古くから、丘陵上には、弥生時代以降の各期の遺跡が存在することが知られているが、これを遡る時期の遺構・遺物の検出例はみられていない。

縄文時代の遺物は、丘陵南麓直近にあって、古墳時代前期の井堰の出土で知られ、断続的に10次までの調査が行われている古照遺跡の井堰を覆う洪水平砂疊層中から、後期を中心として前期末～晩期の土器片の出土がみられているが、これらの遺物は石手川旧流路の氾濫に伴うものであって、該期の遺構に伴うものではない。また、丘陵北東麓の朝美澤遺跡2次調査包含層中から少量の後期土器片が出土している。

弥生時代になると、調査地の所在する大峰ヶ台丘陵一帯や周辺部の微高地で、遺構・遺物の出土がみられるようになってくる。丘陵上や裾部では中～後期のものが主体となっており、前期の遺跡は周辺の微高地に分布している。これら前期の遺跡の中でも、最も遡るのは、先述の朝美澤遺跡2次調査地第3層出土の板付IIa式併行期の遺物群で、現在のところ松山平野の弥生時代のものとしては



- | | | | |
|-------------------------------|-------------------------------|-------------|--------------|
| 1. 大峰ヶ台遺跡 1次・4次調査地 | 5. 大峰ヶ台遺跡 7次調査地
(朝日谷1・2号墳) | 10. 大峰ヶ台Ⅱ遺跡 | 17. 宮前川別用遺跡 |
| 2. 大峰ヶ台遺跡 3次調査地
(客谷A地区古墳群) | 6. 大峰ヶ台遺跡 9次調査地
(大泡東古墳群) | 11. 南江戸森田遺跡 | 18. 宮前川北斎院遺跡 |
| 3. 大峰ヶ台遺跡 5次調査地
(客谷B地区古墳群) | 7. 洋遺跡 | 12. 南江戸蘭日遺跡 | 19. 斎院島山遺跡 |
| 4. 大峰ヶ台遺跡 6次調査地
(注道路) | 8. 洋遺跡 2次調査地 | 13. 松坂古田遺跡 | 20. 津田島遺跡 |
| | 9. 洋魔寺 | 14. 古照遺跡 | 21. 北斎院境内遺跡 |
| | | 15. 岩子山古墳 | |
| | | 16. 東院茶臼山古墳 | |

図1 調査地と周辺の遺跡 ($S = 1:25,000$)

最古段階の遺物を出土する遺跡のひとつに数えられる。また、調査地の1.7km西南方、弁天山丘陵東麓の斎院烏山遺跡の環濠と考えられる溝状遺構からは、前期末の一括遺物の出土をみている。さらに、この斎院烏山遺跡の北方0.6kmの宮前川遺跡別府地区の調査では、包含層遺物として多量の前期末～中期初頭の遺物が出土している。中期中葉では、大峰ヶ台遺跡4次調査として実施された、丘陵頂上部の調査で、大型の円形竪穴住居、小型の長方形・方形竪穴住居、掘立柱建物、段状遺構などで構成された高地性集落が知られている。また、丘陵東麓で行われた6次調査や、さらに東方の松山西部環状線に伴う大峰ヶ台II遺跡の調査で、包含層遺物としての中期中葉の遺物の出土がある。なお、これに続く中期後葉、四線文期の遺跡はこの地域では未だ確認されていない。

後期になると遺跡数は増え、上述の6次調査では丘陵鞍部に投棄された状況で、器台を多く含む後期中葉の土器群が出土し、また、澤遺跡では3基の壺棺墓が検出されている。斎院烏山遺跡の南方1kmの津田鳥越遺跡の1～3次調査では、土鍤や石鍤を多数伴った後期後半の火災住居の検出をはじめとして、多量の土器群が出土している。宮前川遺跡は、古墳時代前期初頭を主とした集落・祭祀遺跡であるが、この遺跡でも多量の弥生時代後期後半～末の遺物群が包含層遺物として出土している。その他、大峰ヶ台丘陵東麓、宮前川畔の朝美遺跡では、高床倉庫の部材の一部であるネズミガエシの出土がみられている。

古墳は、調査地の所在する大峰ヶ台をはじめとして、周辺の岩子山、弁天山等の丘陵上に多く分布している。まず、大峰ヶ台丘陵北西面には、当平野最古の前方後円墳朝日谷2号墳があり、主体部粘土床上から2面の舶載鏡、40本を越える銅鏡・鉄鏡や、鉄剣、ガラス玉等を出土している。また、西斜面で行われた9次調査では、大池東古墳群として5世紀末～6世紀初頭の円墳群や、横穴式石室を主体部とする後期古墳群が調査されており、円墳群からは形象埴輪を含む埴輪類の出土がみられている。この丘陵には、そのほかにも横穴式石室を主体部に持つ後期古墳が多く分布しており、朝日谷1号墳や、3次調査・5次調査で確認された客谷古墳群といった6世紀後半～7世紀前半を主体とした円墳の調査がなされている。この大峰ヶ台丘陵西面では斎院茶臼山古墳がよく知られている。この古墳は、松山平野の横穴式石室を主体部とする古墳としては、最も古い時期に属するもので、5世紀末頃の年代を与えられている。石室は全壇に近い状態の遺存ではあったが、馬具、鉄鏡等の鉄製品類、玉類を比較的多く出土し、また周溝からは円筒・朝顔型埴輪の出土をみている。同じ丘陵上、斎院茶臼山古墳の東部尾根上に展開する岩子山古墳群中の一基、岩子山古墳では1950年代に調査が行われ、人物・馬型埴輪等の形象埴輪が採集されており、6世紀初頭のものとされているが、不明な部分が多い。

これらの古墳が分布する大峰ヶ台・岩子山丘陵南方の低地部には、古墳時代前期の大規模な灌漑用井堰3基の出土で知られる古照遺跡がある。4世紀後半の大規模な土木工事の発見で注目されたのは勿論のこと、堰を構成する1000余本の杭等の部材のなかには、高床倉庫の建築部材を転用したもののが含まれ、建物の復元にもおおいに貢献した遺跡である。しかしながら、これらの井堰・取水口等の遺構の検出にもかかわらず、これに直接かかわる該期の水田は未検出であり、課題となっている。

調査地周辺の平野部では、古代～中・近世の遺構・遺物の検出例が増加している。松山西部環状線建設とともに調査が、(財)愛媛県埋蔵文化財調査センターによって、1985年度から1994年度にかけて実施されたが、このうち1988年度に実施された大峰ヶ台丘陵北東麓部の調査によって平安時代の寺跡の一部が検出され、澤庵寺と命名された。また、中世の水田址、集落・墓等が、この一連の調査

や、南江戸闇目遺跡・古照遺跡上層部において多量の土師器・瓦器・須恵器とともに出土しており、これらの遺物は松山平野の中世土器編年の基準資料となっている。

近世の遺構では、墓を主体に調査が行われている。調査地東南麓の南江戸桑山遺跡は、近世墓地で、11基の桶棺墓、1基の箱棺墓や、その他土塚墓が検出された。また、調査地西南1.5kmの水田地で調査された北斎院地内遺跡でも15・16世紀の墓や掘立柱建物を中心とした遺構群が検出され、4期にわたる集落内での墓域、生活域といった集落変遷の一端が窺える資料として評価されている。

なお、調査地となった花見公園は、先述のように旧領南麓の古刹、大宝寺境内の一角に所在している。この寺は天宝元(701)年の創建と伝えられ、その本堂は鎌倉前期の貴重な建築として、1953(昭和28)年、国宝に指定され、今日に至っている。

文献

- 『古照遺跡』松山市教育委員会 1974
- 名木二六雄『岩子山古墳』松山市教育委員会 1975
- 森光晴・大山正風『古照遺跡Ⅱ』松山市教育委員会 1976
- 「大峰ヶ台の高地性住居址」松山市史料集 第一巻『考古編』松山市 1980
- 西尾幸則『斎院茶臼山古墳』松山市教育委員会 1983
- 大庭雅嗣『宮前川遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター 1987
- 上田 真『南江戸闇目遺跡』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1991
- 栗田正芳・河野史知ほか『古照遺跡－第6次調査－』
- 松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1993
- 栗田正芳『古照遺跡－第7次調査－』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994
- 松村 淳ほか『大峰ヶ台丘陵の遺跡』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994
- 岡田敏彦『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－松環古照遺跡－』
- 愛媛県埋蔵文化財調査センター 1993
- 岡田敏彦『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－大峰ヶ台地区－』
- 愛媛県埋蔵文化財調査センター 1994
- 岡田敏彦『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－親和園前地区・美沢地区・衣山地区－』
- 愛媛県埋蔵文化財調査センター 1996
- 栗田茂敏『大峰ヶ台遺跡－第4次調査』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1995
- 高尾和長ほか『大峰ヶ台遺跡Ⅱ－9次調査』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1998
- 梅木謙一ほか『朝美澤遺跡・辻町遺跡』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1992
- 梅木謙一ほか『斎院の遺跡』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994
- 梅木謙一『朝日谷2号墳』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1998
- 梅木謙一ほか『斎院の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 2001
- 梅木謙一ほか『宮前川流域の遺跡』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 2005
- 梅木謙一ほか『大峰ヶ台遺跡Ⅲ』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 2006

第2章 調査の成果

1. 試掘調査出土遺物 (図2)

前章でも述べたように、試掘調査では申請地の南半の2箇所の調査区において、弥生時代から近世に至る遺物の出土があった。これらの遺物のうち、図化可能なものは以下の2点である。

土製品

紡錘車（1） 最大厚1.0cmで、 $5.6 \times 5.0\text{cm}$ の楕円形をなす土板の中央部に直径0.8cmの孔を焼成前に設けたもの。僅かに欠損しているが、現況で重量30.08gを量る。

須恵器

坏（2） 復元口径11.2cmの坏身小片で、内傾した短い立ち上がりを持つ。

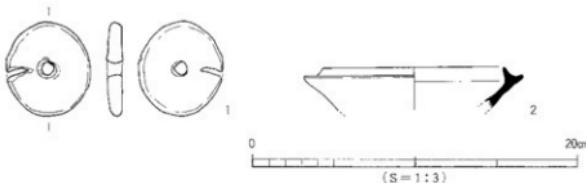


図2 試掘調査出土遺物

2. 調査地の地形と調査区の設定 (図3)

総面積1380.87m²の公園用地のうち、試掘結果をふまえた上、なお掘削により遺構に影響が及ぶと判断された部分が調査対象となった。図3・4のような調査区の形状で、総面積243m²である。トレンチ状に細長い溝状の調査区は、擁壁あるいは配管等による掘削部分で、調査ではT1～T4と呼称し、ある程度面的に掘削できる3箇所について、1～3区の調査区名称を被せた。これらの部分は遊具の設置部分であったり、排水会所が埋設される部分である。前にも述べたように、調査地は大峰ヶ台丘陵の南麓斜面にあたる場所にあって、南に開ける谷の東斜面にあたっている。現況では、盛り土や切り土による造成によって緩やかな南下がりの緩傾斜面となっているが、地山面でみると、東からフラットにひろがってきた面が、1区の西端近くになって西下がりに落ち込んでいくという地形となっている。図4のアミ掛けを施した部分が谷地形の落ち込みの中ということになる。ちなみに調査地の西直下に大宝寺の山門とこれに至る南北道路があるが、この道路部分が谷底にあたり、調査地西端と比べると12mの間に6mの比高差がある。

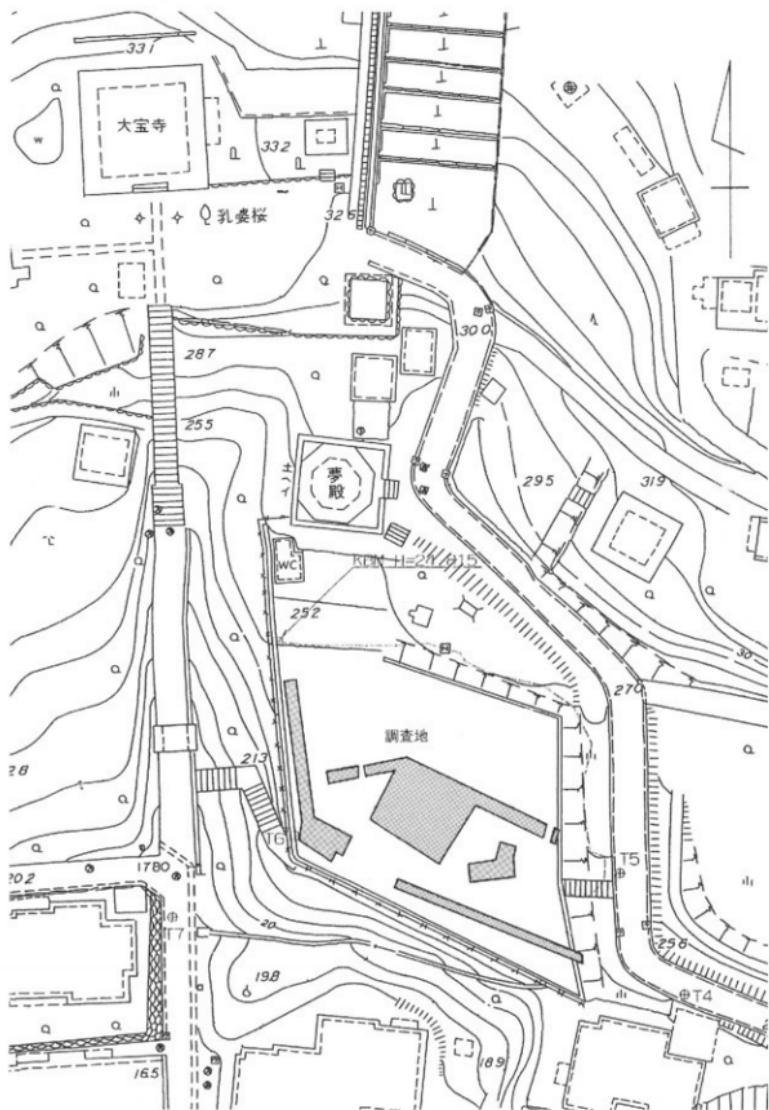


図3 調査位置図 (S = 1:500)

3. 遺構と遺物

上述のような地形から、調査では谷地形の一部と、この谷に流入堆積した遺物を含んだ上層、また、この谷が埋まった後にこれを切ったり、またフラットな地山上に営まれた土坑・柱穴群や烟跡が検出された。以下、各調査区ごとに記述していく。

(1) 1区、T 2・3の調査

1) 遺構

遺具設置部分の1区と、その北に設ける擁壁部分T 2、T 3の調査である。1区は、およそ8.5m四方の正方形、T 2はその北西に接続する、長さ7m、幅1.2mのトレーナー状の調査区、T 3は1区の北東に接続する、長さ9m、幅1.2mの調査区である。1区には旧遺具の設置痕である攪乱が随所に存在したが、その西端付近で図4・5のような、旧谷地形の落ち込みの肩が検出された。T 2は、谷の落ち込みの中ということになる。この谷は、暗褐色～黒色系の土で埋まっており、これらの上の中から弥生土器、石製品、須恵器、土師器など古代以前の遺物を包含している。また、この谷が埋まった後、この包含層や地山を切って、土坑SK 1・2や直径20cm程の柱穴が検出された。

a. 土坑(図5・6)

SK 1は、直径0.8m前後のほぼ円形プランのものであるが、最深部でも深さ5cm程度の遺存でしかない。黒灰褐色砂質土で埋まっているところは、次に述べるSK 2や柱穴群と同じである。遺物の出土はなかった。SK 2は1.4×1.0m程度の不整形のもので、深いところで10cm、西側にテラス状に浅くなる部分がある。攪乱に切られて検出された。この土坑からも遺物の出土はない。

b. 柱穴(図5)

検出された柱穴は15基、T 2で1基検出されたほかは1区での検出である。暗灰色系のシルトを埋土としており、後述の水田と同様、江戸時代のものと考えられるが、削平が激しく、特に地山面で検出されたものは、深さ2～3cm程度の遺存であった。SP 7～9の3基は直線上には載っているが、建物を構成できるかどうかは不詳である。また、包含層上面で検出されたSP 5、6は比較的しっかりと柱穴で、掘り方近くに埋土として微細がドーナツ状に薄く存在するなどの共通する特徴を有するところから、なんらかの同一の構造物を構成していた柱穴と考えられる。

c. 煙(図5)

煙は1区の東半で検出された。検出されたのは取水口状の石組み施設と水路状の溝と東西方向に走る畝状遺構であったが、畝は灰色細砂をベースとしていたため、降雨により消滅してしまった。石組み施設や本来同一遺構を形成していたと考えられる集石にからんで、土師器皿や陶器片の出土がみられている。また、この煙を覆った灰褐色の砂からも土師器、陶器、鉄製品が出土した。耕作痕跡には、鉄分やマンガン粒の含有が少ないとところから、水田ではなく煙と判断している。

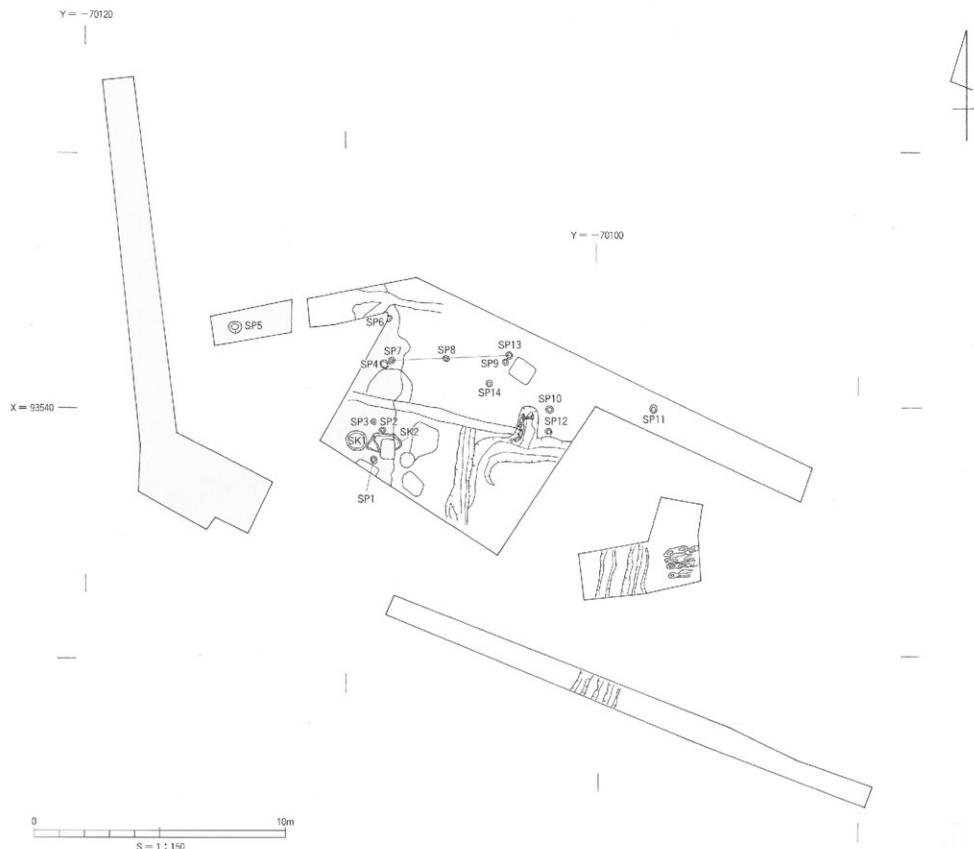


図4 調査区全図

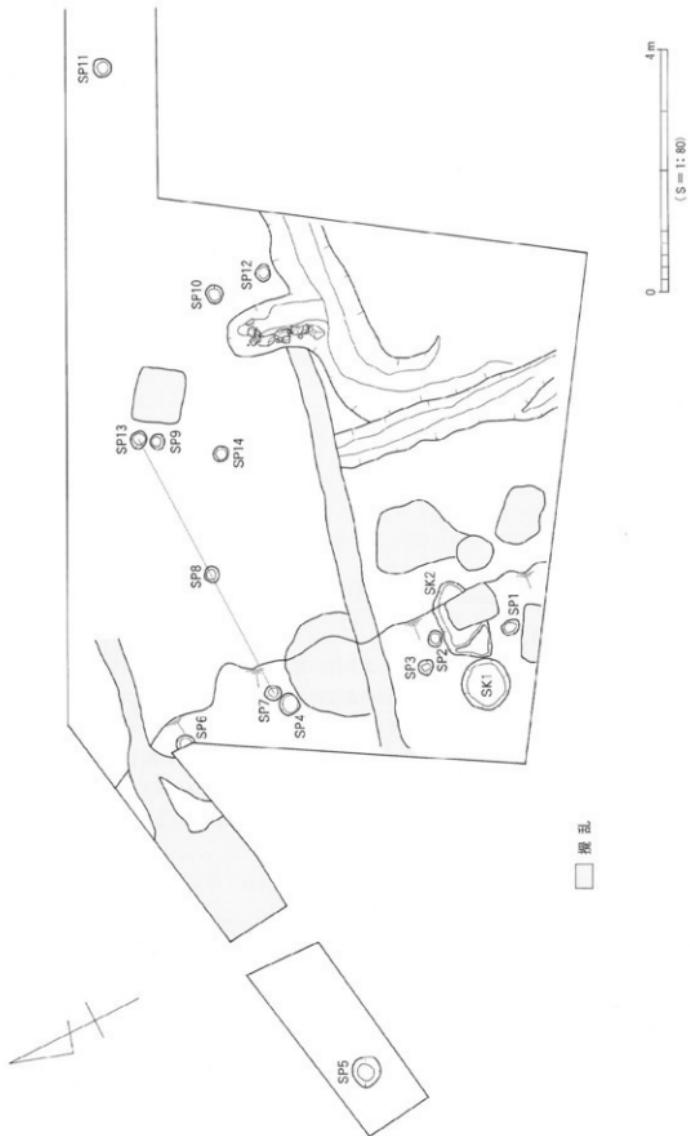


図5 1区、T2の遺構配置

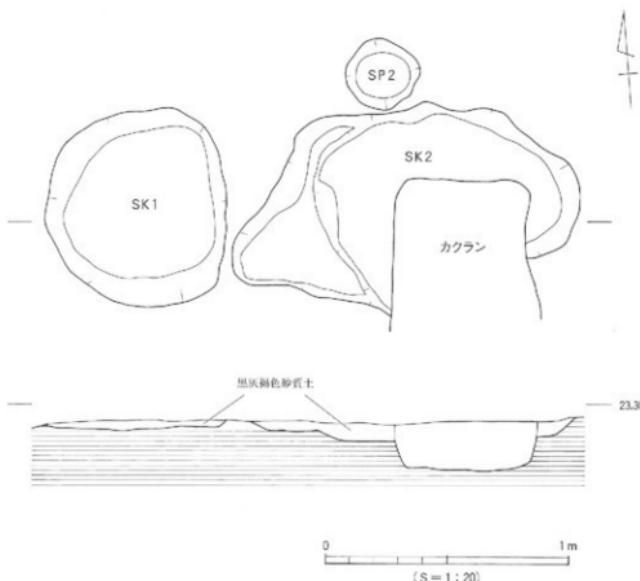


図6 土坑SK1・2

d. T2・T3の調査(図7・8)

先述のとおりT2は1区にくらべると、谷のより深い部分にあたり、1区の谷埋土である暗褐色～黒色系のシルトは、図7に示したT2北壁土層の最深部に出現する第8層に相当する。数字は逆転するが、その上位にも若干土質や土色の異なる16層や17層が出現する。したがって、T2ではこの8層とその上位の層の2層に分けて遺物を採り上げたが、このうちの16層に関しては、T1や3区の土層からすると、純粹な包含層ではなく、いずれかの段階での造成土の一部であることが後に確認されている。なお、図7に記載された上層説明は、本書の記述や、使用した土層図すべてに共通している。

その他、T3では顕著な遺構の検出はなかったが、1区や後述する2区、T4で検出された烟の覆土である灰褐色砂層から若干の遺物の出土をみた。

2) 出土遺物

a. 1区谷部(第8層)出土遺物

弥生土器(図9～12)

甕(3～22) 3～7は頭部に圧痕文突帯を持つもので、貼り付けにより頭部が稜を持って屈曲する3、4、7と折り曲げによる5、6がある。前者のうち口端部まで遺存するものの口端面には刻み目が施されている。8～10は無文のもので、9の頭部外面にはヘラ状工具痕がある。これらの口

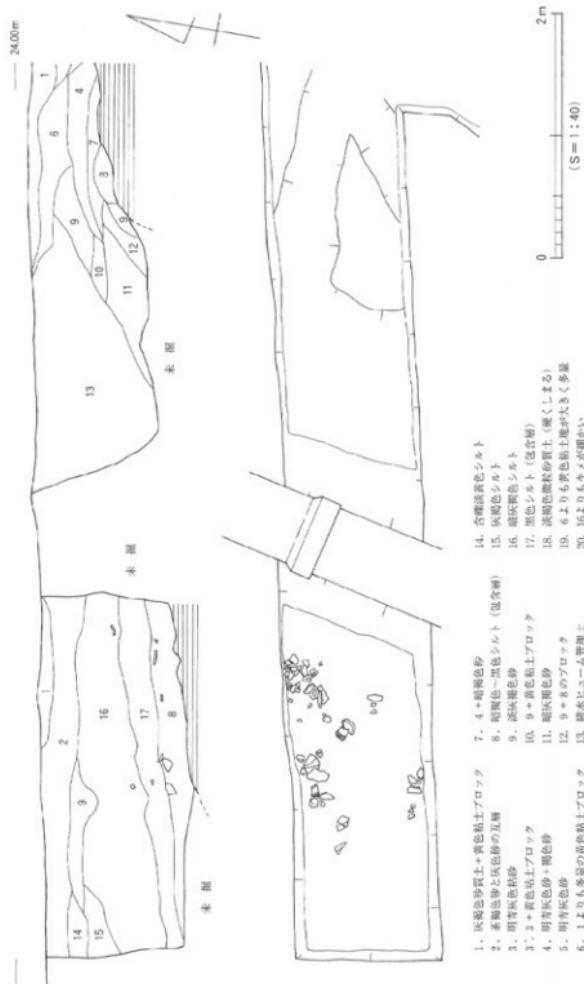


図7 T2第8層出土状況・北壁土層図

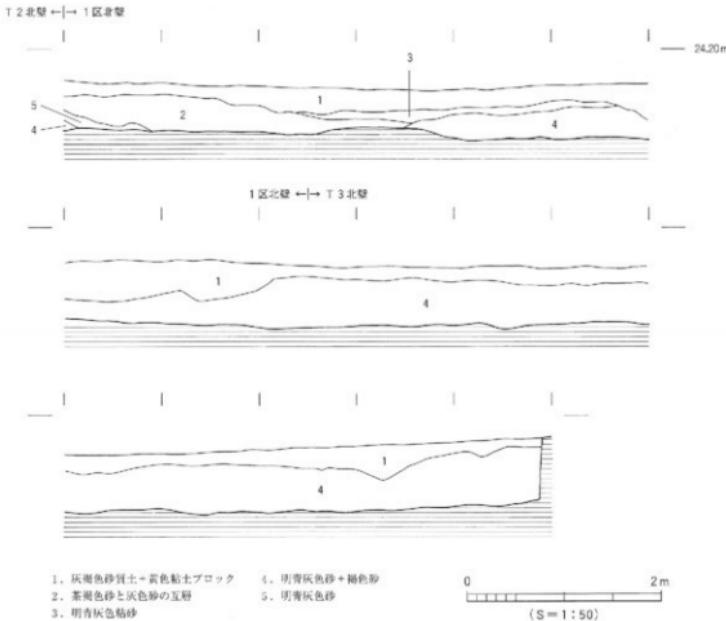


図8 1区北壁～T 3北壁土層図

頸部は中期中葉のものであるが、11は中期後葉の凹線文系もので、口端部を上方に僅かに摘み上げ、端面に1条の凹線状の窪みが巡っている。底部12～22にはくびれの上げ底のものと平底のもののふたとおりがある。18は小型の鉢かもしれない。

壺（23～45） 口頸部のうち、23～29が口端部を拡張して端面に施文を持つものである。23、24、29にはヘラ描きの山形文が施されるが、29ではなお、口縁部内面に円形浮文を貼り付けられている。25～27は端部上下端もしくは上端に刻み目を持つもの、28は端面に粗い櫛歯状工具で波状文を描かれている。30、31は口縁部内面突帯を持つもので、30には焼成前の穿孔が行われている。31～35は無文の口縁部片である。突帯を持つ頸部36～39のうち、36～37には断面三角形の多重突帯、38には圧痕文突帯が貼り付けられている。40、41は櫛描きの波状文を持つ肩部の片で、40では波状文の上下に直線文を組み合わせている。底部には、安定感のある平底と若干の窪み底になるものがある。これらの壺も中期中葉のものである。

高坏（46～51） 46、47は水平に近い口端面を内外に拡張して、外端面に刻み目を施すもので、46には口端面から口縁部直下の外面に貫通する穿孔が焼成前に行われている。48は充填による坏底部、49は比較的低い脚部片で、端面全体で接地する。これも充填によるものであるが、充填部位がはずれている。50も充填による坏底部がはずれたもので、49にくらべると高い脚部である。51は、以上の中

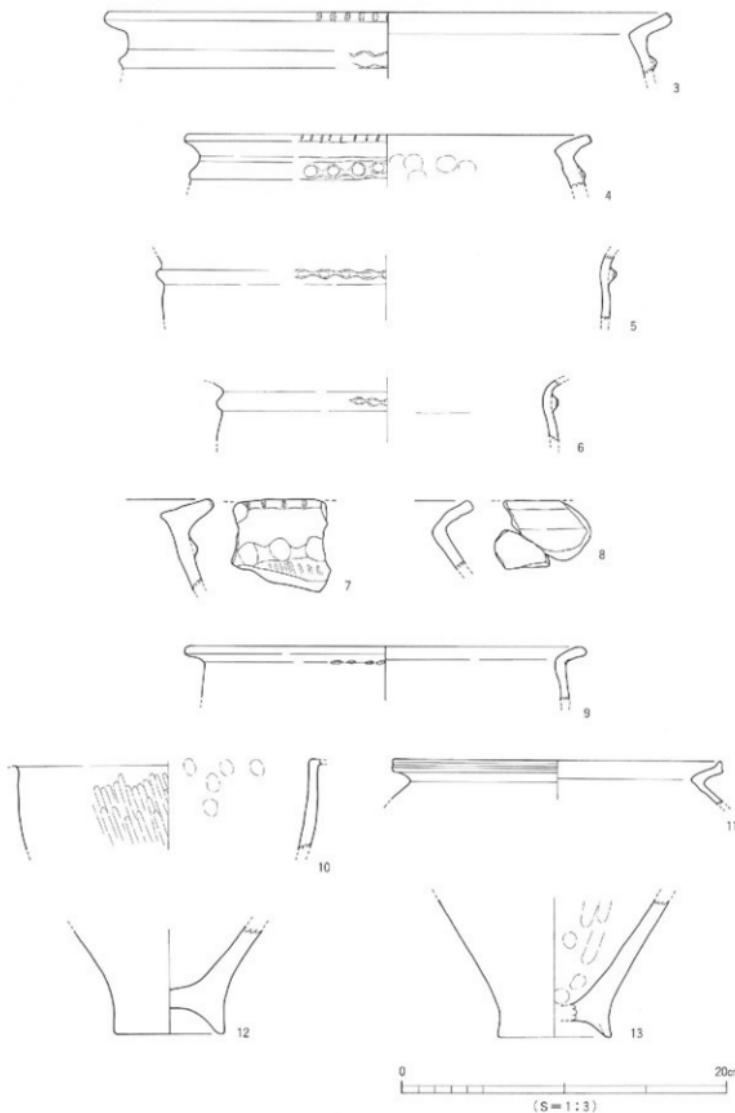


図9 1区谷部（第8層）出土遺物(1)

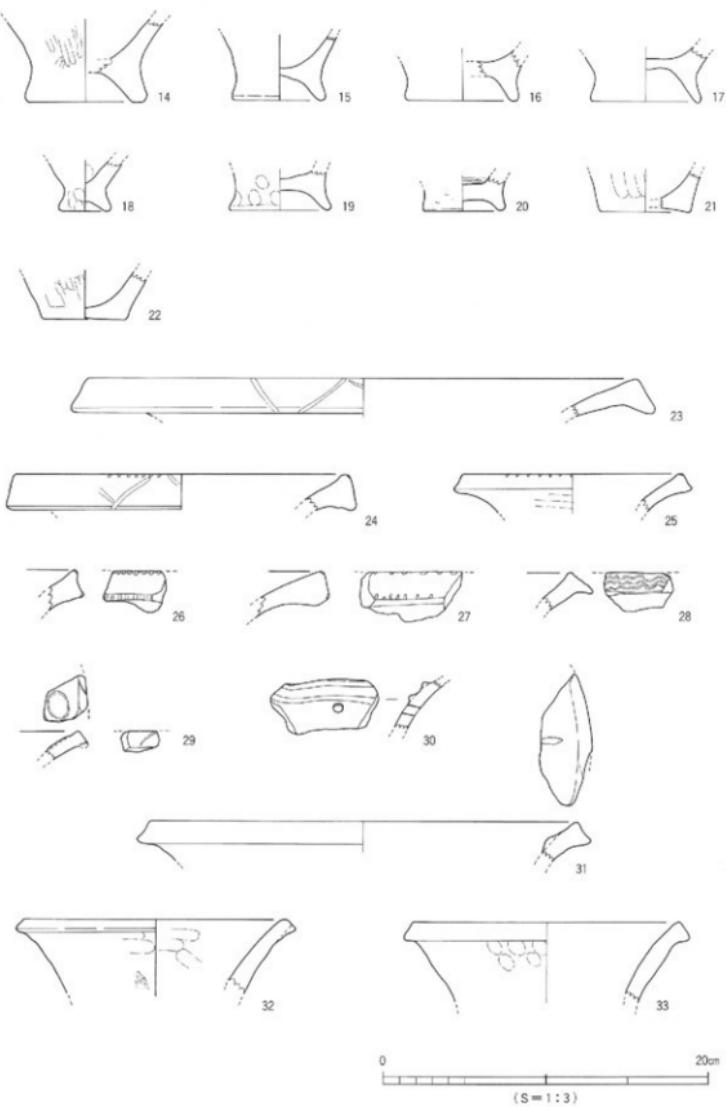


図10 1区谷部（第8層）出土遺物(2)

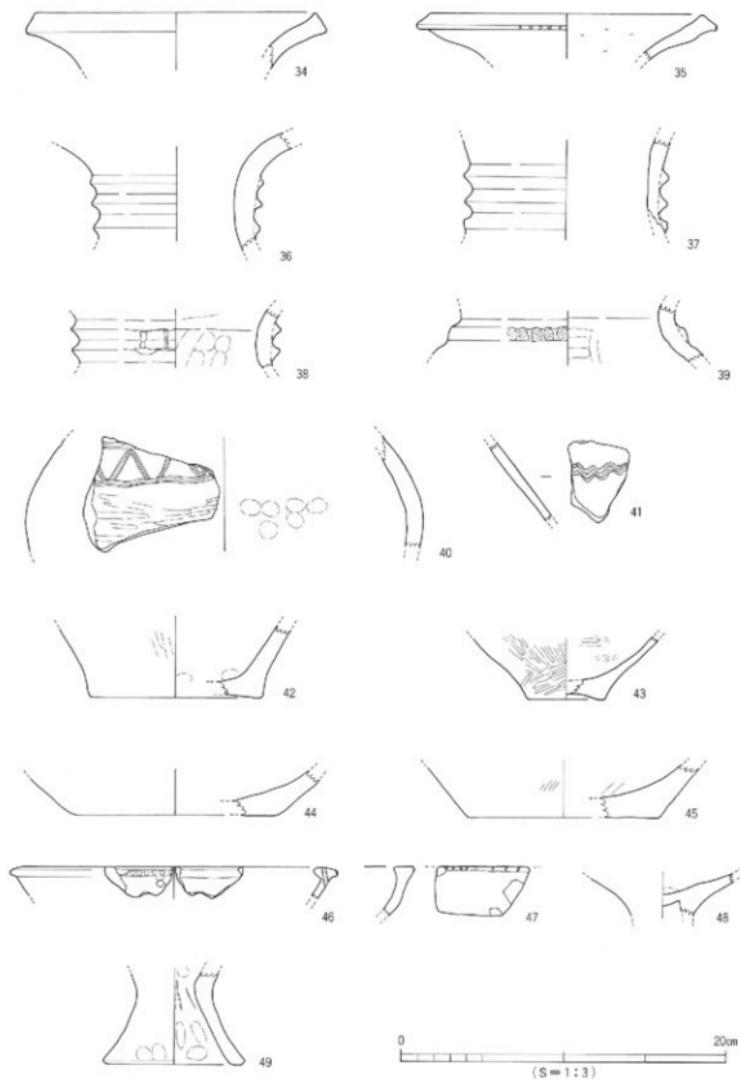


図11 1区谷部（第8層）出土遺物(3)

期中葉の高坏よりも降る後期の脚部である。

ジョッキ形土器（52～54） 52は口縁部片で、内外面ともによく磨かれている。53、54は把手の片で、どちらも体部との差し込みによる接合部である。

土師器

皿（55） 底部を回転糸切りされた灯明皿、器高2.1cm、口径9.2cmを測る。口縁部の内外面に煤の付着がある。谷のかなり浮いた部分で出土しているので、上層遺構に伴うものであろう。

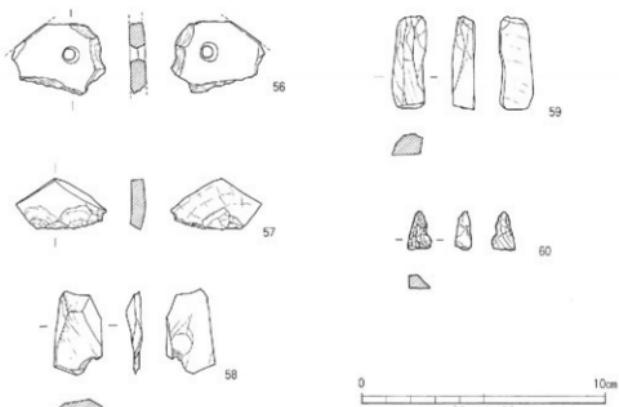
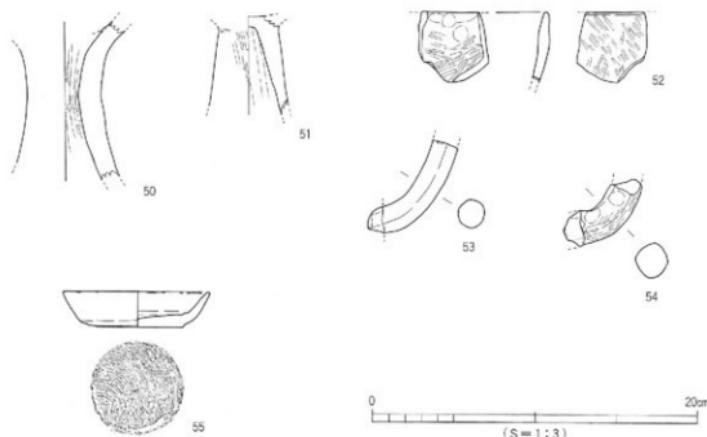


図12 1区谷部（第8層）出土遺物(4)

石器・石製品

石庵丁 (56) 緑泥片岩を素材とする穿孔部の片。背部の刃の一部が生きている。穿孔は両面から行われている。

剥片 (57~60) 57はサスカイト、58、59が赤色チャート、60は緑色チャートの剥片である。

b. 1区畠出土遺物(図13)

磁器

碗 (61) 肥前系染付碗口縁部。外面に施された文様は不詳。

皿 (62) これも肥前系染付皿の口縁部小片で、口縁部内面に四方博文、外向の文様は唐草の一部か。18世紀。

香炉 (63) 波佐見青磁の半筒状の香炉である。18世紀。

陶器

皿 (64) 内外面に薺灰釉を施した輪花皿で、外面の高台部分は露胎である。

揃り鉢 (65・66) 65は備前揃り鉢の注口部付近の破片で、間隔のある太い揃り目が施されている。16世紀代のものであろう。66は堺産、口縁部外面に2条の凹線、口縁部にまで至る内面の揃り目は軽く撫でられるが、撫で消されてはいない。18世紀後半のもの。

土師器

皿 (67~74) 底部の確認できるものはすべて切り離し後調整されているが、73でわずかに糸切りの痕跡を確認できる部分がある。おそらく回転糸切りによっているものと思われる。74は土師器皿の底部片で、中央部に焼成後の穿孔が内面から行われている。

碗 (75) 断面三角形の貼り付け高台を持つ底部片。内面は磨かれている。

石器・石製品

擦り石 (76) 被熱して破損した擦り目のある石の破片である。凝灰岩。

剥片 (77) サスカイトの小剥片である。

金属製品

鉄釘 (78・79) 両者ともに断面長方形をなす釘で、78で現況長8.2cmを測る。尖端部を僅かに欠き、また頭部も欠いている。79は折れ曲がった身部の片である。

尾錠 (80) 幅0.6cm、厚さ0.3cmの鉄板を折り曲げて製作したものである。

錢貨 (81) 寛永通宝の破損品、背面は無文である。

c. 1区攢乱出土遺物(図14)

弥生土器・土製品

甕 (82~84) いずれも頸部に圧痕文突帯を持つ口頸部片。82、84は折り曲げ口縁で、82の口端面は刻まれている。

壺 (85~88) 無文の口縁部片85と、86~88の半底の底部が出土している。

ジョッキ形上器 (89) 把手の片、断面形は橢円形状をなす。

紡錘車 (90) 断面形紡錘形をなす粘土板の中央に焼成前の円孔を持つ。半裁品で、現況重量6.24gを量る。

調査の成果

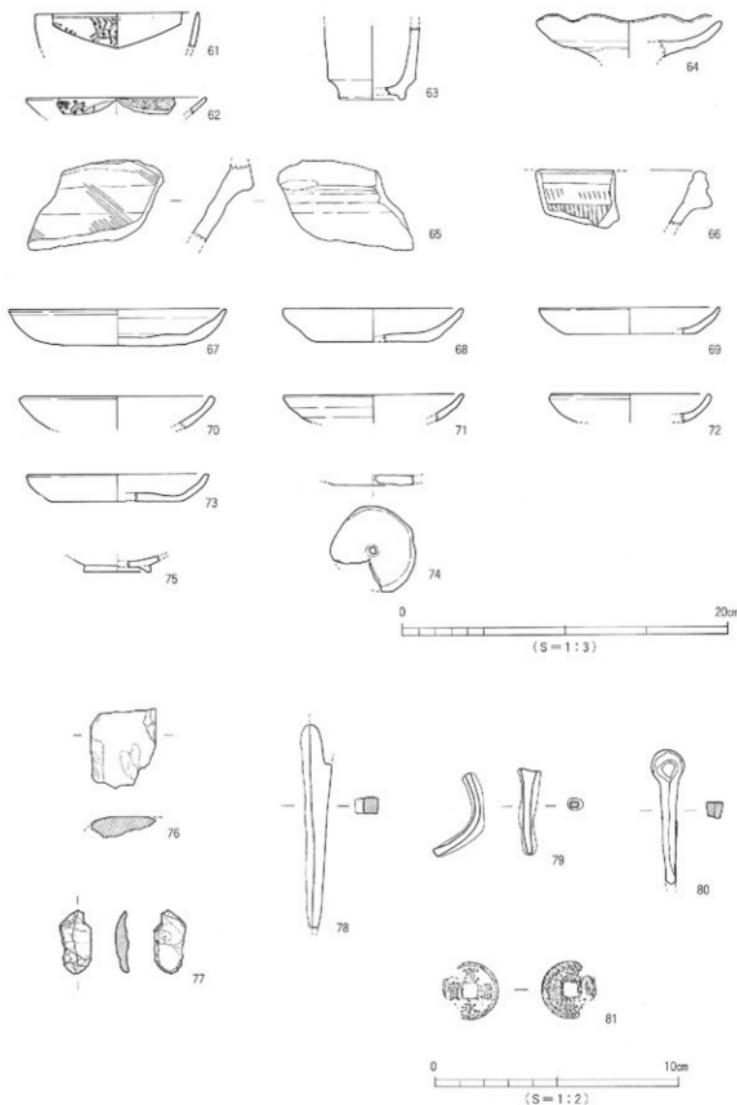


図13 1区烟出土遺物

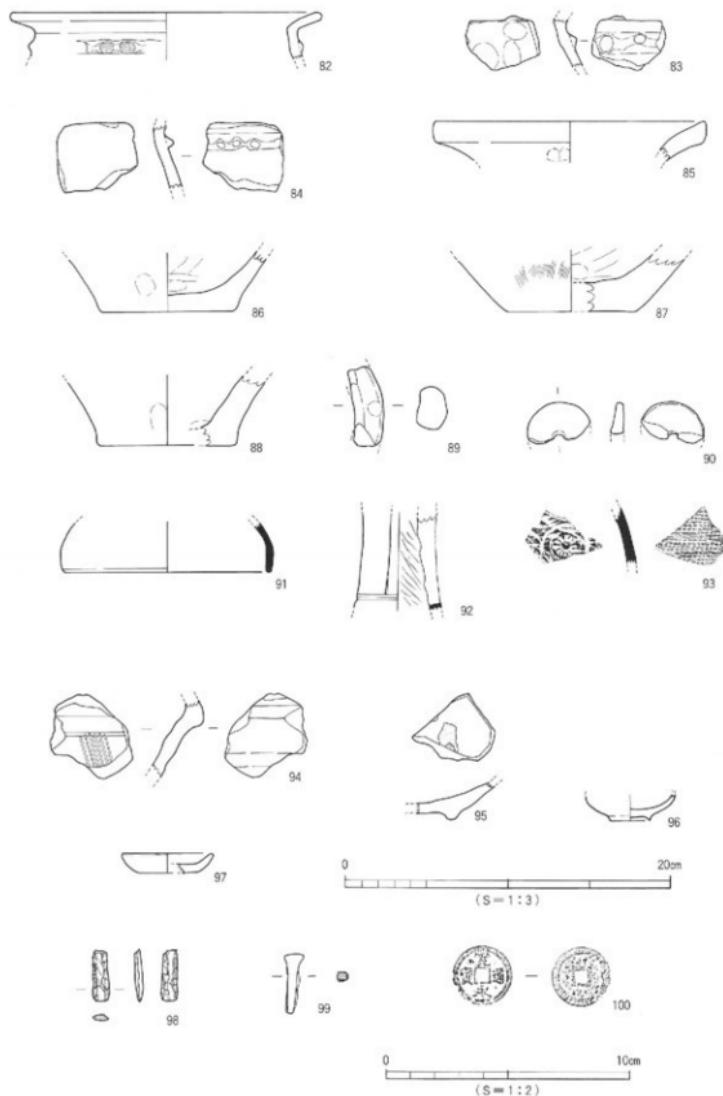


図14 1区擾乱出土遺物

須恵器

坏 (91) 復元口径12.8cmを測る蓋の片。口端部を丸くおさめ、口縁部、天井境に沈線や稜を持たないものである。

高坏 (92) 長脚二段透かしの脚部上位の片。上下の透かしの間に1条の凹線が確認できる。透かしは3方向に復元できる。

壺 (93) 壺部片。内面に輪花状の当て具痕がある。6世紀末から7世紀前半のものであろう。

陶器

掘り鉢 (94) 備前掘り鉢、内面に6条単位の掘り目が間隔をおいて施されている。

皿 (95) 肥前系青磁の皿。釉は青白色に発色している。内外面の全面施釉で、内面には砂目痕がある。17世紀前半。

碗 (96) 肥前系白磁の小碗で、内外面全面施釉されている。

土師器

皿 (97) 復元口径5.8cmの小皿。底部は調整されているため、切り離しは不明である。

石器

石錐 (98) 赤色チャートを素材とするもので、錐の刃部と思われる。

金属製品

鉄釘 (99) 断面方形の釘頭部から上半部の片。

錢貨 (100) 寛永通宝、直径2.4cmを測る。

d.T 2第8層出土遺物(図15・16)

弥生土器

壺 (101~106) 101は復元口径27.7cmを測るものである。壺部上位に最大径を持つが、口径が上回っている。口縁部は貼り付けにより、稜を持って水平に近いところまで屈曲している。頸部には圧痕文突帯が巡る。外面は、綻から斜め方向に、また内面は斜めから横方向に入念に磨かれている。102はLJ縫面に刻み目を持つ口縁部片、103は無文の口頸部片である。底部104~106はくびれの上げ底である。106は、壺ではなく鉢の底部であるかもしれない。すべて中期中葉のものである。

壺 (107~112) 107は復元口径32.9cmになる口頸部である。外上方に大きく開く口縁部は、端部を下方に大きく拡張し、端面にヘラ描山形文を施文している。頸部には断面三角形の貼り付け突帯が2条まで確認できる。108も端部を下方に拡張して端面に斜格子の施文を行うものであるが、107のように大きくなれない。109は無文の口縁部片。頸部110、111は、それぞれ突帯を持つもので、110の突帯は摩耗して断面蒲鉾形に近くなっているが、本来三角形であったものである。111の突帯は圧痕文突帯である。これらの壺も中期中葉のもの。

土師器

壺 (113) 復元径20.0cmの口縁部が緩く開くもの。長胴丸底の器型になるものと思われる。8世紀代のものか。

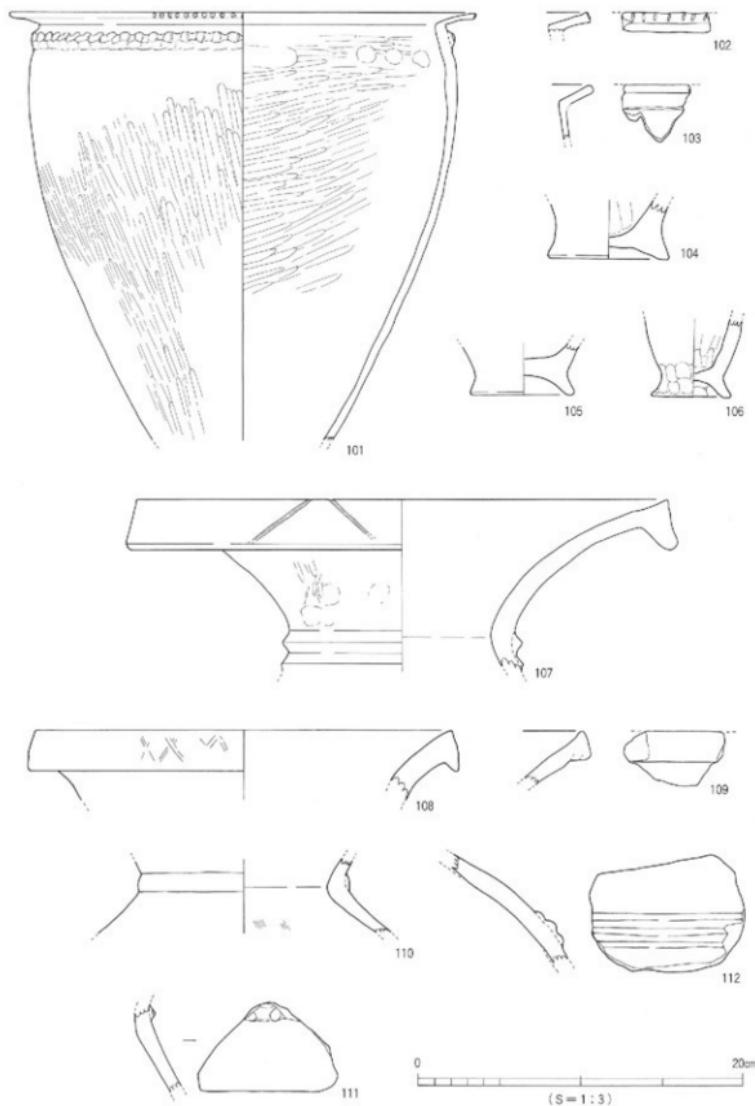


図15 T 2 第8層出土遺物(1)

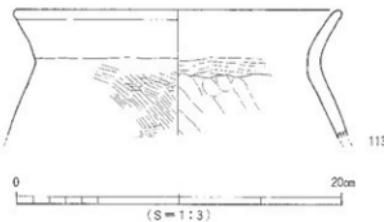


図16 T2第8層出土遺物(2)

e. T2第16・17層出土遺物(図17~19)

弥生土器・土製品

甕(114~119) 口縁部片には、頸部に圧痕文突帯を持つもの114~116と無文の117がある。114は折り曲げによる口縁部で、口縁部にしっかりと面を持つが、刻み目などは施されない。底部には若干の上げ底118と平底119がある。すべて中期中葉のものである。

壺(120~124) 口縁部片のうち、120、122は端部を下方に拡張するもので、120は無文であるが、122の端面にはハラ描斜格子文が施されている。121の端部に拡張ではなく、平坦な面に細い工具による刻み目を持つ。甕の口縁であるかもしれない。頸部123には断面三角形の突帯が3条巡り、その上になお、2本ひと組の棒状浮文が貼り付けられている。124は平底の底部。これらの壺も中期中葉のもの。

高坏(125) 脚部片、据端部外面に2条の凹線、その上に貫通する矢羽根透かしを持つ。据は内端で接地する。中期後葉のものであるが、透かしが貫通するところにやや古い傾向が窺える。

土玉(126) 直径1.9cmを測る上製の玉、重量7.22gを量る。

須恵器

壺(127~138) 壺127~132はすべて後期の単純な器型のもの、132は短頸壺の蓋であるかもしれない。身133~138も、立ち上がりが短く内傾する、やはり後期のものである。

高坏(139・140) 139は長脚二段透かしの脚部片。140も同様のものの脚端部であろう。

甕(141) 口縁部に平坦な面を持つ口縁部片である。

土師器

鉢(142~144) 142、143ともに口径に若干の不安があるので瓶や鍋の口縁であるかもしれないが、一応復元された口径からすると鉢としたほうがよかろう。144のような底部と組み合っていたものと思われる。

高坏(145・146) 145は脚部上位の片、146は円孔を持つ脚据部。

陶器

徳利(147) 产地不詳、備前に似た焼成の焼き締め陶の徳利底部である。

石器・石製品

石庖丁(148) 緑泥片岩の小型方形石庖丁の未製品。刃部の叩き減らし、両側縁の抉り、いずれも途中で放棄している。

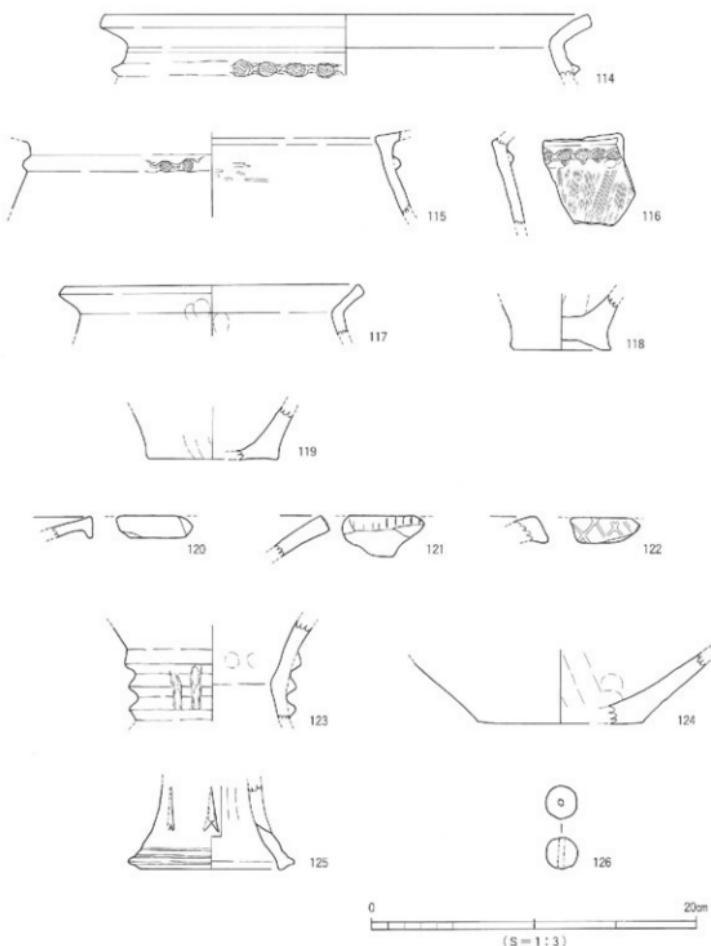


図17 T2第16・17層出土遺物(1)

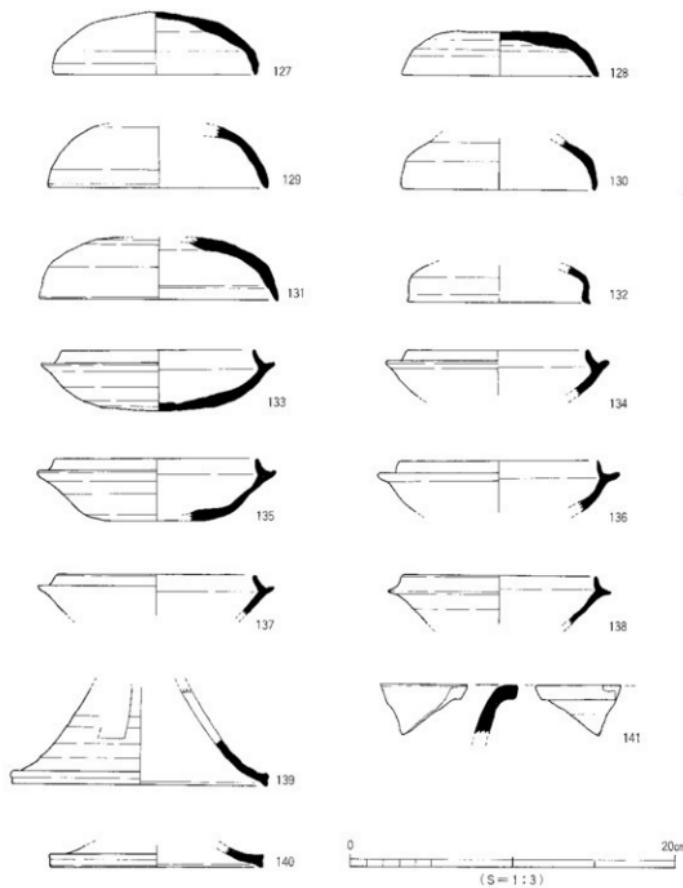


図18 T 2 第16・17層出土遺物(2)

- 砥石 (149) 陶石製の方柱状小型砥石破損品で、4面ともに使用されている。
- 鉄器・鉄製品
- 鋤先 (150) U字状鋤先の一部、断面Y字形をなしている。
- 鞍具 (151) 馬具の一部であったものと思われる。

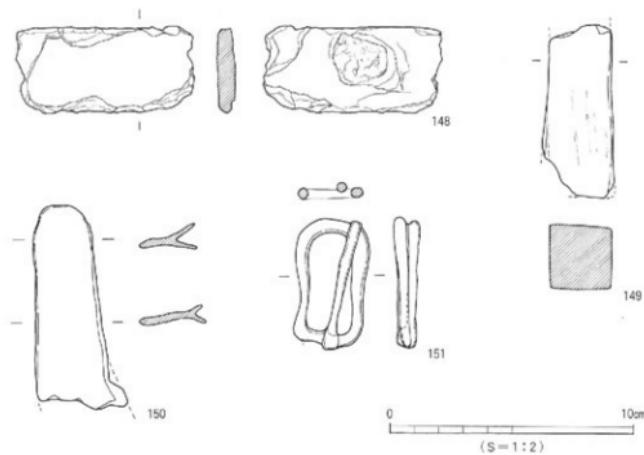
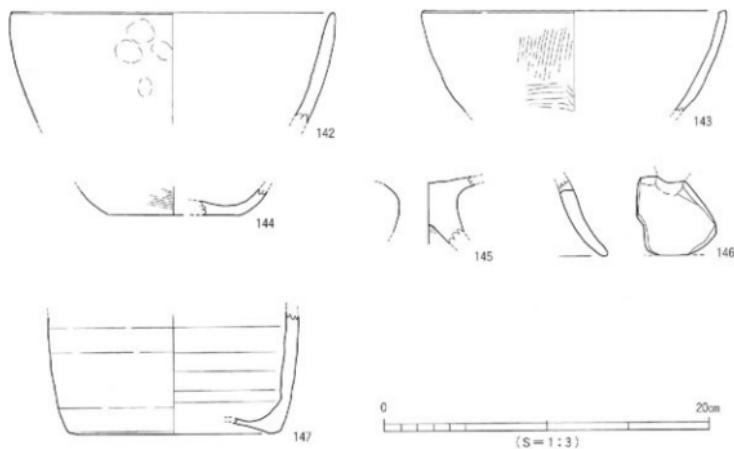


図19 T2第16・17層出土遺物(3)

f.T2 摂乱層出土遺物(図20)

陶器

皿(152) 濱戸美濃系灰釉の折縁皿である。

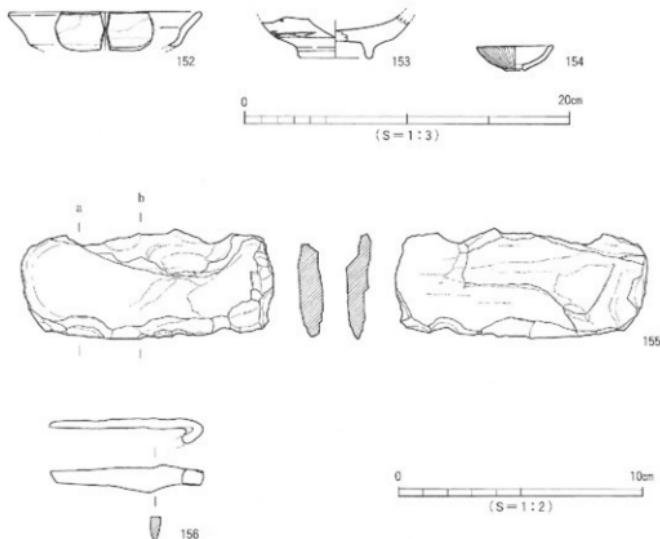


図20 T2擾乱層出土遺物

磁器

碗（153） 波佐見の染付碗高台部分。外面に描かれているのは山水文か。

皿（154） 肥前系白磁の紅皿。外面型打ちの貝殻状形態で、口唇部は水平な面をなす。19世紀前半～中頃のもの。

石器・石製品

石庵丁（155） 緑泥片岩を素材とする石庵丁未製品。刃部を叩き減らし、片面の一部（断面a周辺）を研ぎに入った段階で背部近辺が大きく剥離したため、製作を放棄したものと思われる。

鉄器

刀子（156） 小型の刀子であるが、茎の部分を折り曲げている。なにかに転用したものか。

g.T3出土遺物（図21）

磁器

碗（157） 産地不詳の染付碗。外面の高台脇と腰部に圓線が1条ずつ巡る。内面は無釉。

上師器

皿（158） 灯明皿、口縁部内外面に煤が付着している。

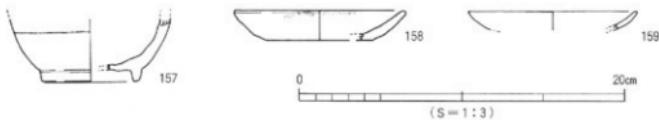


図21 T3出土遺物

陶器

皿 (159) 備前と思われる灯明皿の口縁部片である。

(2) 2区、T4の調査

1) 遺構 (図4・22)

2区も遊具の設置に伴う調査区で、その南の東西方向のトレンチ状の調査区T4は擁壁建設に伴うものである。2区、T4ともに、1区の東で検出された畠のひろがりが、畝状の耕作痕や畦畔状の盛り上がり、また溝として確認された。

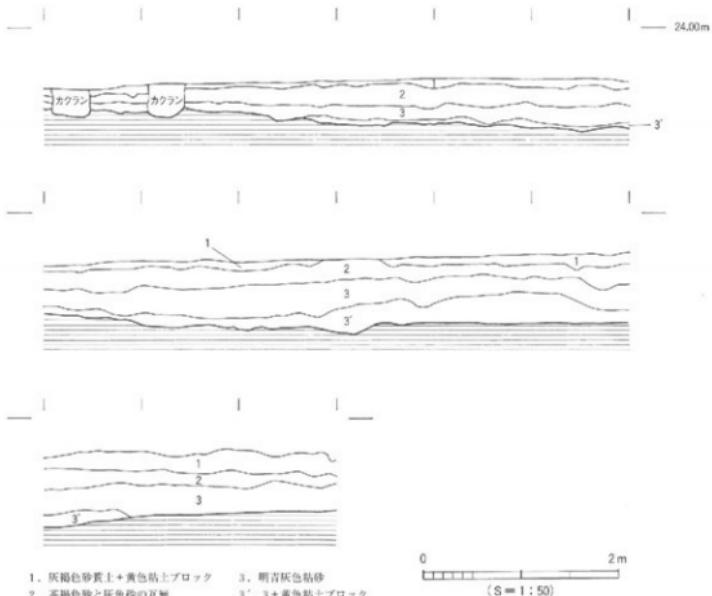


図22 T4北壁土層図

2) 出土遺物(図23)

陶器

皿(160) 2区出土で、唯一図化できたものである。肥前系の京焼風陶器の皿で、貫入のある淡黄色の釉、見込みには海浜風景の一部と考えられる鉄絵文様がある。高台内面は無釉である。17世紀後半～18世紀前半。

鉄製品

釘(161～163) すべてT4の出土。断面方形の鉄釘のうち、完形の161でみると、その法量は長さ10.0cm、身は1.1cm四方の方形断面、頭部は1.3cm四方に潰されている。重量5.8gを量る。

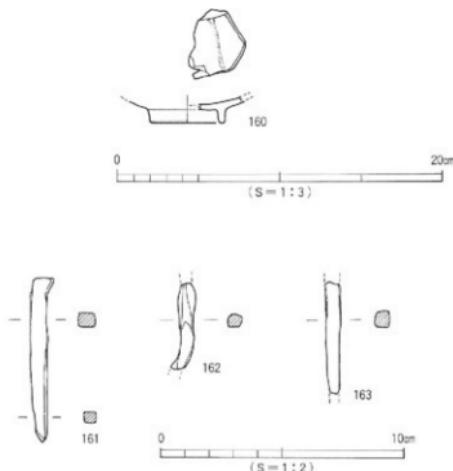


図23 2区、T4出土遺物

3) T1、3区の調査

1) 土層(図24・25)

T1は調査地西端に設けた、幅1.5m、長さ15mのトレンチ状の調査区で、その南端で3区へと続く。これらの調査区は、現況で南北に入り江状に入り込んだ谷の東直上にある。この部分に排水溝や排水会所、階段施設を設置することに起因する調査区である。現況では、谷を見下ろす肩の部分にあるが、旧地形では1区の西端近くから下がる谷の中に位置することとなる。T1、3区ともに現地表面から深さ1.2m程度掘削したが、法面の直上に位置しているため、雨天時の崩落等の危険を考慮して、これ以上の掘削は控えた。その結果、1区やT2で確認された17層やその下位の8層まで届くことはできなかった。ここでの遺物の出土は、それらの上層にあたる15層あるいは16層といった灰褐色系のシルト層、あるいはここで最上層となっている客土(14層)からである。また、3区にはもと

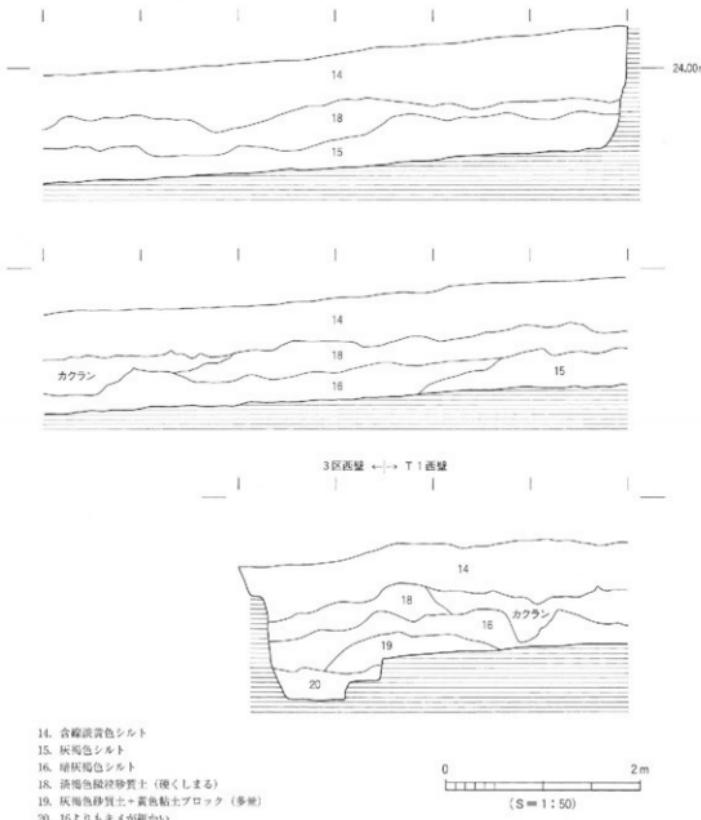


図24 T1西壁土層図

もと排水用のヒューム管やこれに続く会所が設置されているため、この区の東半はほとんどこれらの既存施設の埋土で占められており、この攪乱土中からの遺物の出土も多かった。

また、16層の下位には他の調査区に存在しない19・20層があり、3区ではこの層からの遺物の出土もあった。

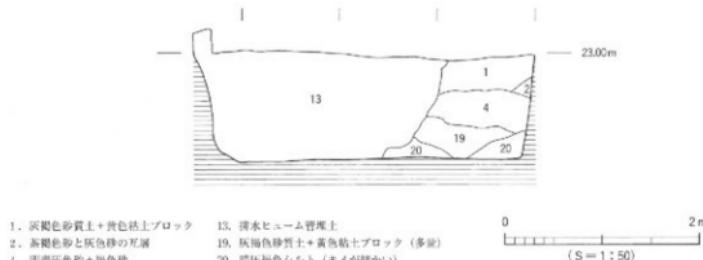


図25 3区南壁土層図

2) 出土遺物

a. T 1 第14層出土遺物 (図26-164~166)

土師器

鍋 (164) 三足鍋の足の部分である。

皿 (165) 器高1.6cm、復元口径8.3cmの小皿。

陶器

鍋 (166) 内面に鉄釉をかけた鍋で、外底部は無釉である。

b. T 1 第18層出土遺物 (図26-167~175)

弥生土器

壺 (167) 口縁部の片、拡張した口端面にヘラ描山形文を持つものである。

須恵器

壺 (168・169) 168は復元口径10.4cmを測るもので、内傾した短い立ち上がりを有する。169では立ち上がりがさらに短くなっている。

甌 (170) 円孔部位の胴部片で、浅い沈線が円孔の直上に1条巡っている。

土師器

鍋 (171) 三足鍋の脚端部の片である。

陶器

鉢 (172) 唐津刷毛目の鉢口縁部片、17世紀。

磁器

皿 (173・174) いずれも肥前系染付。口縁部173は口唇部内面に2条の圈線、外面には蔓草文様を描かれている。174は底部片、内面見込部分に宝文様を持つ。两者ともにやや青味を帯びた釉に、にじむような淡い乳頭と、似通った特徴を持っているので、同一個体であるかもしれない。17世紀後半頃のものか。

鉄製品

釘 (175) 断面方形をなす釘の身部片である。

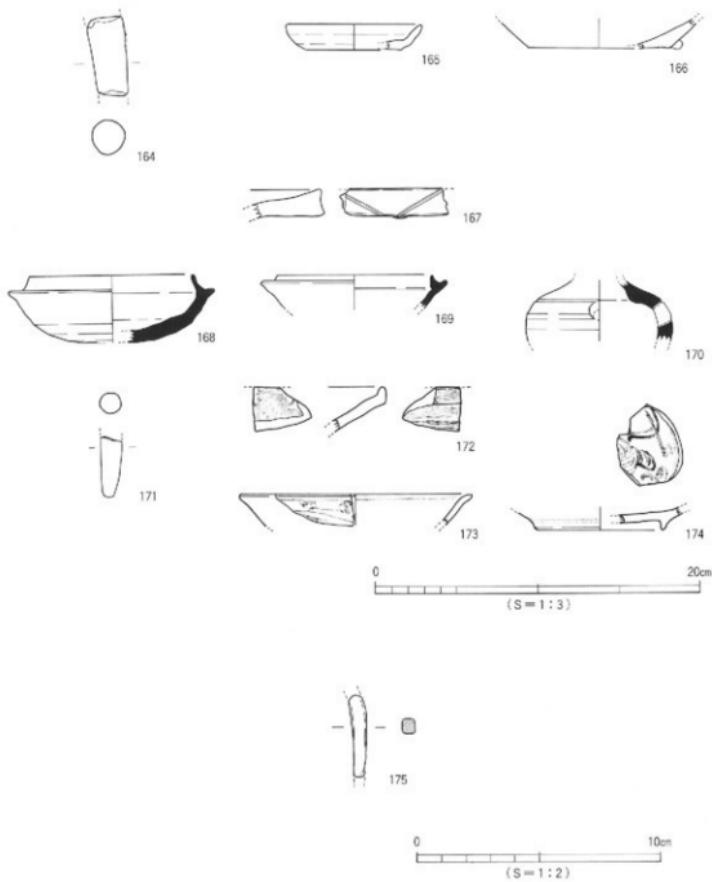


図26 T1出土遺物

c.3区第16層出土遺物（図27-176～179）

須恵器

坏（176～179）蓋176・177、身178・179ともに古墳時代後期のものである。

d.3区捜乱出土遺物（図27-180～187）

陶器

掘り鉢（180）備前掘り鉢口縁部の片である。口縁部外面の施文帯に2条の沈線、内面の掘り目

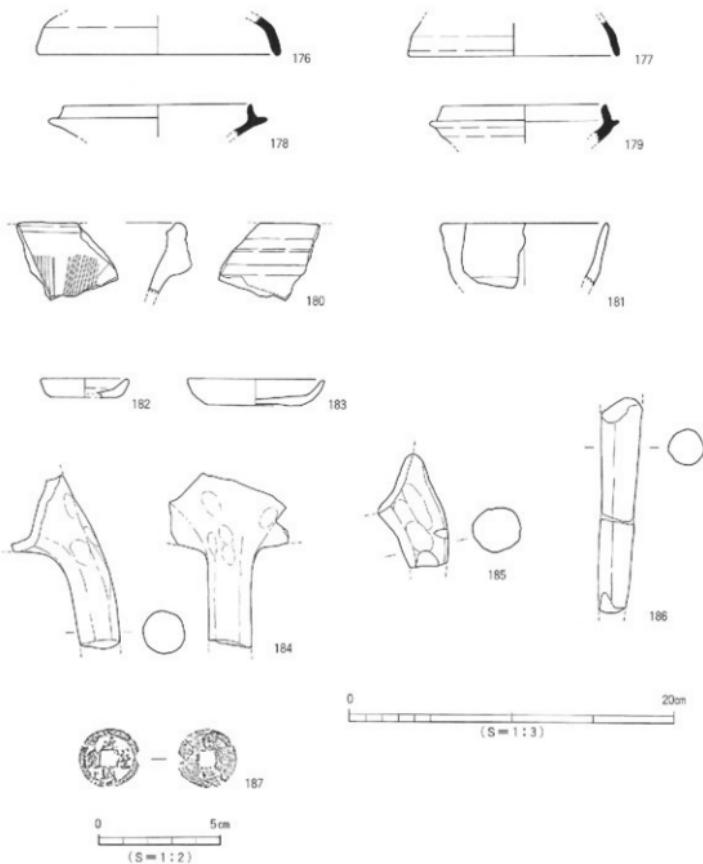


図27 3区第16層・擾乱出土遺物

は8条単位の間隔を置いた放射状になるものと思われる。17世紀後半のもの。

碗（181）瀬戸美濃系灰釉の碗で、外面腰部以下には施釉されない。

土師器

皿（182・183）両者ともに外底面の切り離し痕を粗く撫で消されたものである。

鍋（184～186）三足鍋の脚3点。184・185は鍋底との接合部で、煤の付着がある。

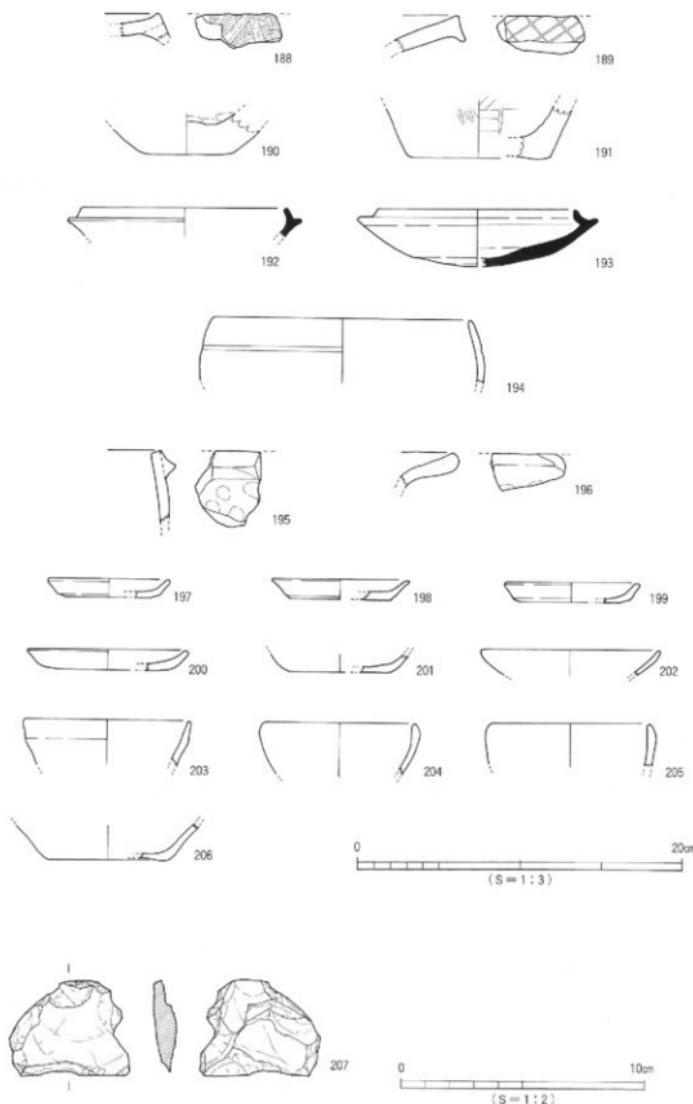


図28 3区第19層出土遺物

金属製品

銭貨（187） 元寶通宝。1078（元寶元）年初鑄の北宋銭である。

e. 3区第19層出土遺物（図28）

弥生土器

壺（188～191） 口縁部2点ともに、端部を下方に拡張して端面に施文を行うもので、そのうち188は7～8本が1単位の櫛歯状工具を用いて、端面全体に横走する直線文を地文のように施し、その上から同じ工具の1単位で山形文を描いている。189はヘラ描斜格子文を施文されるものである。190、191は平底の底部。

須恵器

壺（192・193） ともに、短い口縁が内傾して立ち上がる壺身で、193は、器高約3.6cm、復元口径12.3cmを測る。口端部は、きれいに撫で調整されず、端部内面に部分的に残るユビオサエの痕跡や、誤ってヘラで削り取ってしまった部分を修正されることなく焼成されている。

鉢（194） 内湾しながら内傾する口縁部で、口縁下に1条の浅い沈線を持つ。

土師器

鍋（195・196） 195は外面口縁部に断面三角形の突帯を貼り付けられるもの、196は単純に外開きになる鍋の口縁部片である。

皿・壺（197～206） いずれも小片で、うち、198、199、201の外底面に回転糸切りの痕跡が確認できる。

石製品

剥片（207） 一部に自然面を持つサスカイト剥片である。

（4） その他の採集遺物（図29）

掘削排土中から採集した遺物がいくつかあるので、掲載しておく。

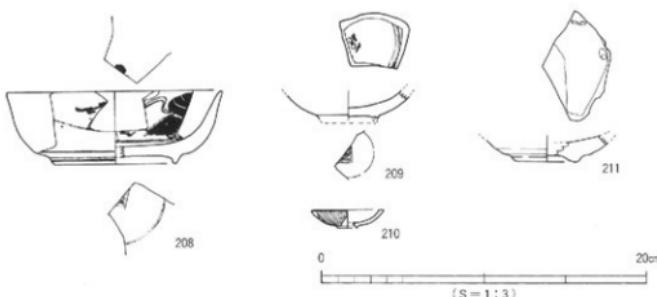


図29 採集遺物

磁器

皿（208） 肥前系染付の皿、器高4.5cm、口径、高台径ともに復元値でそれぞれ14.4cm、7.7cmになるものである。内面見込と口縁部の境に二重、口唇部に一重の圓線を引き、その間に宝文を描く。見込にはコンニャク判によるとと思われる五弁花が施されている。裏文様は唐草、高台脇に一重、高台外面に二重、また高台内面に一重の圓線を施す。高台内には二重方形枠銘款の一部が観察できる。18世紀。

碗（209） 肥前系外青磁碗の底部。高台内以外の外面に青磁釉、高台内面には白磁釉をかける。高台内面には二重方形枠を伴った渦福銘がある。内面見込には二重圓線に手描き五弁花が施されている。18世紀後半。

紅皿（210） 肥前系白磁の紅皿。外面型打ちの貝殻状形態で、T 2出土の154と同形態のものであるが、口唇部の面がやや狭い。19世紀前半のもの。

陶器

皿（211） 産地不詳の皿、内面に銅緑釉がかけられ、見込みに胎土目の痕跡がある。低い高台の外面は露胎である。

第3章　まとめ

今回の調査では、この遺跡の立地にふさわしく、大峰ヶ台丘陵上に存在する多くの遺構群からの流失遺物と考えられる遺物群の出土をみた。この丘陵上では、弥生時代においては高地性集落や上器廢棄跡などが知られている。また、前期から後期にかけての古墳時代全般を通じて古墳が営まれていることは周知のとおりである。調査で出土した弥生時代の遺物は中～後期のものが主体で、中でも中期中葉のものが圧倒的に多い。1988（昭和63）年、総合公園メインエントランスの整備に伴って行われた6次調査地はこの丘陵東麓にあたるが、ここでも丘陵上方からの流失遺物と考えられる中期中葉の遺物群の堆積があり、似通った状況がこの南麓でも確認されたといえる。現時点で丘陵上で確認されている中期中葉の集落は頂上部の高地性集落、4次調査地のみであるが、麓でのこのような遺物の出土例をみると、頂上部に限らず、丘陵の各所に小規模な生活遺構が点在していた可能性が考えられる。その他、これらの弥生遺物と混淆状態で出土した須恵器類は、すべてが古墳時代後期のもので、これらはこの丘陵に数多く分布する後期の古墳群に出来するものであろう。柱穴や烟道構は、出土した上師器皿や僅かな陶器片からみて江戸時代後期頃ものと考えられる。小規模な虫食い状態での調査で、全体像の復元は難しいが、寺院を間近に望む緩傾斜地での小規模な畠や、これに伴う簡素な小屋といった往時の景観が推定されよう。

写 真 図 版



調査前全景(1) (北より)



調査前全景(2) (南東より)



掘削風景（北東より）



掘削完了後全景（東より）



1区西部擾乱状況（南東より）



1区西部谷地形検出状況（南東より）



1区西部谷遺物出土状況（北東より）



1区遺構検出状況（北より）



1区烟水口状遺構（北東より）



2区烟遺構検出状況（東より）



3区南壁土層（北より）



T1全景（北より）



T4全景（西より）



T 2 第8層遺物出土状況（南西より）



107



101



126

1

90



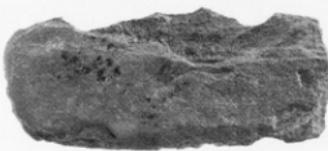
56



93

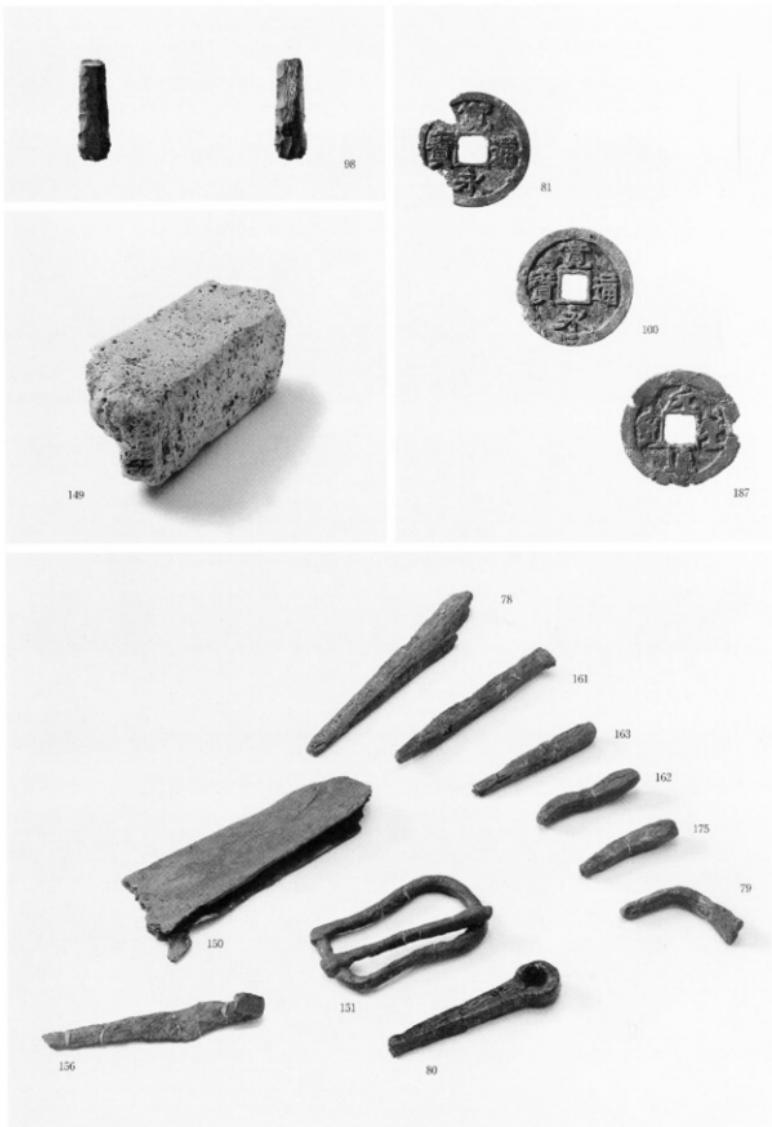


148



155

出土遺物(1)



出土遺物(2)



出土遺物(3)



出土遗物(4)



出土遺物(5)

報告書抄録

ふりがな	おおみねがだいいせき							
書名	大峰ヶ台遺跡－10次調査－							
副書名								
卷次								
シリーズ名	松山市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第119集							
編著者名	栗田茂敏							
編集機関	松山市教育委員会 財団法人 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 TEL 089-948-6605 〒791-8032 松山市南禱院町乙67-6 TEL 089-923-6363							
発行年月日	西暦 2007年 3月 31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
おおみねがだいいせき 大峰ヶ台遺跡 10次調査地	えひめけん まつやまし 愛媛県松山市 みなみえど 南江戸	市町村	遺跡番号	33°50'30"	132°44'30"	20061201 ↓ 20070131	243m ²	公園整備
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大峰ヶ台遺跡 10次調査地	集落 散布地	弥生 古墳 古代 中近世	土坑、柱穴 烟道構	弥生土器 須恵器、上師器 陶磁器、石器 鉄製品、錢貨				

松山市文化財調査報告書 第119集

大峰ヶ台遺跡 —10次調査—

平成19年3月31日 発行

編集 松山市教育委員会
発行 〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1

TEL (089) 948-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター

〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6

TEL (089) 923-6363

印刷 株式会社 明朗社
〒791-2112 伊予郡砥部町重光150番地1

TEL (089) 958-6868
